

音便現象と語彙の並列的關係

那須昭夫

キーワード：音便，直列的關係，並列的關係，接辞，他動性，一音節性

1. 本稿の目的

複合語での音便現象を論じる上でしばしば問題とされがちなのは，音便形が語彙的にどのような位置づけられるかということである。この点に関し，音便形をその元の形である非音便形と直列的に関係づける(1)のような捉え方に基づく議論が，従来広く行われてきた。

(1) 直列的關係性

非音便形 ——(音便化)——→音便形

このような関係づけが支持されてきたのは，音便化という形態音韻論の派生過程を介して音便形と非音便形との間に直観的な類似性が観察されるからに他ならない。

ところで，(1)のような直列的關係性が広く議論されてきたのに対して，異なる音便形どうしの「並列的」とも言うべき関係性は，これまであまり注目されることがなかったと言える。たとえば「ひっつける」と「くっつける」の二つの音便形を例にとると，この両者は下線を付した要素が異なっているためにそれぞれ別個の語彙項目として位置づけられ，一見したところ何の関わりも持たないかのように思われる。だが，ここで少なくとも三つの問題を指摘しておく必要がある。第一の問題は，別個の項目として位置づけられるはずの「ひっつける」と「くっつける」が，次のような同一の文脈の中では相通的に現れる事実があるということである。

(2) 新しい服にガムを {ひっつけ/くっつけ} られた。

別個の音便形が同一の文の中で同じ位置に現れるということは，両者の間に何らかの関連性が成立しているからに他ならないわけだが，従来こうした事実を捉える視点は構築されてこなかった。第二に指摘しておくべきことは，「ひっつける」が「ひきつける」と直列的に関係づけられる一方で，「くっつける」にはそのような関係づけの対象となる非音便形が存在しないということである。(1)のモデルに沿って考えると，非音便形を持たない「くっつける」がどのような言語的動機を背景に形成されたかという疑問が残ってしまう。これと関連して第三に，音便化を伴う複合語の中には次のような一群が含まれるという事実も指摘しておきたい。

(3) 非音便形を持たない形

すつとばす，すつころぶ，すつとばす，おっぱじめる，おったまげる，
ずっこける，くつつく，くつつける.....

これらの複合語に共通するのは、いずれもその元の形態である非音便形が存在しないということである。直列的關係性(1)だけに依拠すると、非音便形を持たない複合語の形態が一体どのような言語的動機によって生み出されたものなのか明らかにすることは難しい。これらの複合語がその前項に「おっ-, くっ-, すっ-, ずっ-」のような類似した要素を持つことや、その構造が一般の複合動詞前項の音便形と同じく一音節の形をなしているということは、決して偶然の所産ではなく、何らかの言語的動機ないしは構造上の素地があってこそこのようなパターンの形成が支持されると考えるべきであろう。その構造上の素地を明らかにするためにも、音便形を非音便形との関連の上で直列的に捉えるだけでなく、音便を起こした形相互の並列的關係に注目した分析が不可欠だと思われる。

そこで、以下本稿では上述の問題を出発点として、これまであまり論じられることのなかった音便形どうしの並列的關係について考察することにした。まず第二節では、(2)に挙げた現象について概観し、並列的關係を仮定することが音便を分析する上で不可欠な視点であることを述べる。続けて第三節では、音便化と複合動詞の他動性の問題を通して、異なる音便形どうしが並列的關係を示す実態を詳しく見てみる。また第四節では、複合語の音便形を並列的に観察した際に見出される音韻的共通性について、複合語前項の音節構造に着目して論及する。

2. 音便形どうしの相通性と並列的關係モデル

前節で少し触れたように、音便化した複合語の中には全く別個の語彙項目であるにも関わらず同一の文において互いに相通的に用いられ得る組み合わせがいくつか観察される。それらを例文とともに(4)に列挙しておこう。

(4) 音便形どうしの相通性

a. ひつつく~くつつく

例) 服に糸屑が {ひつついて/くつついて} いる。

b. ひつつける~くつつける

例) 新しい服にガムを {ひつつけ/くつつけ} られた。

c. おったまげる~ぶったまげる

例) 宝くじが当たったと聞いて {おったまげた/ぶったまげた} 。

d. ふっとぶ~すっとぶ

例) 子供の急病を知って家に {ふっとんで/すっとんで} 帰っていた。

e. ふっとばす~すっとばす

例) 高速道路を 140 キロで {ふっとばした/すっとばした} 。

f. ひっこむ~すっこむ

例) 連打を浴びた桑田投手がベンチに {ひっこんだ/すっこんだ} 。

g. ひっこめる~すっこめる

例) 驚いて首を {ひっこめた/すっこめた} 。

h. とっぱじめる～おっぱじめる

例) いきなり戦争を {とっぱじめた／おっぱじめた}。

i. おっぽうりだす～ほっぽうりだす

例) 嫌になって仕事を {おっぽうりだした／ほっぽうりだした}。

これらの複合語の対を見て気づくのは次のようなことである。上に挙げたもののうち(4b, d, e, f, g)では、対をなす複合語の一方だけが非音便形を持ち、もう一方は非音便形を持たない*1。たとえば「ひっつける～くっつける」の対では、「ひっつける」が非音便形「ひきつける」を有する一方で「くっつける」には対応する非音便形が存在しない。非音便形との関係によって音便形の語彙的位置づけを試みる直列的な捉え方にとっては、この事実は厄介な問題につながる。(5)に示したように、「くっつける」に関しては直列的に関係づけられる非音便形が存在しないため、「→」で示されるような派生関係自体がそもそも成立し得ないからである。

(5) 直列的解釈

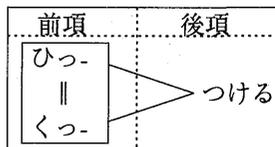
a. ひく+つける → ひっつける

b. ? +つける → くっつける

直列的解釈では、たとえば(5a)「ひっつける」と(5b)「くっつける」が相通的な振る舞いを見せるとしても、語形が異なる以上両者は別個の語彙項目として切り離されてしまうが、そのように両者の関係性を全く断ち切って考えてしまうと、非音便形を持たない「くっつける」のような形がどのような言語的動機に基づいて形成されたものなのか明らかにすることが困難になる。加えて、(4e, h, i)の対では、いずれの複合語も非音便形を持たない。たとえば(4c)「おったまげる～ぶったまげる」では、たしかに「*おしたまげる」や「*ぶちたまげる」のような語形を仮定できないこともないが、それらが実際に使われない以上、そのような架空の非音便形を仮定してまで直列的解釈を押し通すことには疑問を抱かざるを得ない。

そこで、異なる音便形どうしの相通現象を捉えるために、次のような並列的な関係性のモデルを考えてみたい。例として「ひっつける」と「くっつける」の対を挙げる。

(6) 並列的モデル

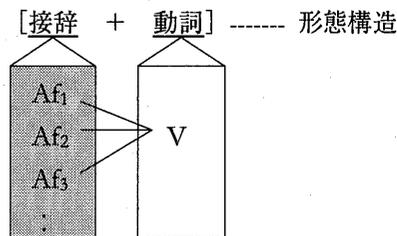


この捉え方でとりわけ重要なことは、非音便形との関係づけから一旦離れて専ら音便形相互の関係だけを明示できるということと、図中の「||」で示したように、前項「ひっ-」および「くっ-」が等価な関係を持つものとして位置づけられるということである。後項「～つける」を共有した「ひっつける」と「くっつける」が同一の文で相通的に現れるという事実は、前項「ひっ-」および「くっ-」が形態的には異なっても実質的には同一の機能を共有していることを示唆するが、(6)のモデルではそのような等価性を明示的に捉えることができる。

ところで、この「同一の機能」とは一体どのようなものなのだろうか。この点を明らかにするためには、音便化に伴って生じる前項の接辞化の問題に触れておく必要がある。音便を起こした複合動詞ではその前項の実質的意味が失われやすく、それに伴って前項から動詞としての性質が失われ、代りに接辞としての性質が生じる傾向が観察される(斎藤 1986a,b, 1988, 影山 1993)。(4d)「ふつとぶ~すつとぶ」の対を例にこの点について考えてみよう。直列的な解釈に基づくと、「ふつとぶ」の前項「ふつ-」は動詞「吹く」に由来すると考えられる。しかし、斎藤(1986a)が指摘するように、「子供の急病を知って家にふつとんで帰っていった。」のような表現では「ふつ-」にはもはや動詞「吹く」としての実質的意味が残っていない。このことは、「子供の急病を知って家に*ふきとんで帰っていった。」が不自然な表現になってしまうことを見れば容易に理解できよう。このため、「ふつ-」が複合語「ふつとぶ」の一部として現れる場合、それは意味の抽象化した接辞として機能しているとみなされるべきであろう。同時に、「すつとぶ」の前項「すつ-」に関しても実質的な意味を求めるのは全く不可能である。つまり、「すつ-」も「ふつ-」と同様に接辞として解釈されることから、「すつとぶ」が「ふつとぶ」と相通的に用いられるのはそれぞれの前項「すつ-」「ふつ-」が接辞としての機能を共有しているからに他ならないとの結論を導くことができる。

以上検討したように、「ふつ-」を動詞「吹く」と直列的に関連づけるよりは、むしろ接辞として働いている「すつ-」との並列的な相通性を示すという事実の方を重視し、「ふつ-」もまた「すつ-」と同様に接辞として機能していると考えた方がより実態に近い解釈につながる。同じく(4)で指摘したその他の複合語間の相通性も、並列的モデルに基づいて考えると同一の論理で分析することができる。(4)で下線を付したそれぞれの対は互いに形態の違いこそあれ、実質的にはほぼ同一の接辞的機能を担う等価な語彙項目として位置づけられるべき性質を持っていると考えられる。こうした等価性を把握するための並列的モデルを、ここであらためて一般化した形で示しておきたい。

(7) 並列的モデル



接辞のパラダイムに含まれる要素“ Af_1, Af_2, Af_3, \dots ”は、仮にそれぞれが異なる語彙項目から派生されたものであったとしても、共時的体系の中では互いに等価な並列的關係なしていると考えられる。同時に、これらの要素は形態的にも極めて高い類似性を示す。前節で指摘したように、「ひつつく、くつつく、おったまげる、ぶったまげる、ふつとぶ、すつとぶ、とっばじめる、ほっぼうりだす」などの下線部は全て促音を含む一音節の構造を持つが、この点については第四節で扱うことにしたい。

3. 音便化と他動性

本節では、上で述べた音便形どうしの並列的関係性が単に形態のレベルに留まるものではなく、文法的な関係にも反映されているということについて、音便化を被る複合動詞の他動性を検証しつつ論じる。

複合動詞の他動性は「右側主要部の原則」に従う形で後項の性質によって決定づけられるが(影山 1993)、このあり方は音便化が作用しても変わるものではない。音便形と非音便形の両方が存在する複合動詞では、両者の他動性は音便の有無を問わず一致している。

(8) 他動性の一致

- a. 追いかける～追っかける： i) 犬を追いかけた。(他動詞)
ii) 犬を追っかけた。(他動詞)
- b. 取り替える～取っ替える： i) ドアの鍵を取り替えた。(他動詞)
ii) ドアの鍵を取っ替えた。(他動詞)
- c. 引き返す～引っ返す： i) 偵察機が基地に引き返した。(自動詞)
ii) 偵察機が基地に引っ返した。(自動詞)

非音便形が他動詞として機能している場合、それに対応する音便形もまた他動詞であり(8a,b)、非音便形が自動詞であるならば、対応する音便形も自動詞として機能する(8c)。このことは、音便が複合語の統語的性格に対して何ら影響を及ぼさない、単なる形態音韻論的な作用であることを意味している。

ところが、複合動詞の中には音便形と非音便形との間で他動性が変わってしまうものがある。一例として「ひきこむ～ひっこむ」という対を挙げ、まずは例文を通して他動性の相違の事実を確かめておこう。

(9) 「ひきこむ～ひっこむ」

- a. 優秀な投手をチームにひきこんだ。(他動詞)
- b. 打たれた投手がベンチにひっこんだ。(自動詞)

「ひきこむ」が述語動詞となる文(9a)では名詞「投手」に対格が与えられるが、「ひっこむ」が述語動詞の場合(9b)では「投手」はその動作主として解釈される。したがって前者は他動詞であり、後者は自動詞である。ちなみに、この格関係を逆転させた次のような文は不自然である。

(10) 「ひきこむ～ひっこむ」

- a. *優秀な投手がチームにひきこんだ。
- b. *打たれた投手をベンチにひっこんだ。

このような他動性の変化が起こってしまう背景には、まず後項「～こむ」がもともと自他両様の性質を持つ動詞であるという特殊な事情がある(影山 1993)。このため、論理の上からは(10)の文をあからさまに不自然とは断定できないと言えるかもしれない。だが、そのような論理的可能性

(13a)は「ひきこむ～ひっこむ」という直列関係であり、(13b)は「ひっこむ：ひっこめる」という並列関係である。当然ながら、並列的な関係をなす複合語の間には直列的關係に見られるほどの形態上の類似性は観察されない*2。しかし、以下検証するように、自動詞「ひっこむ」がより自然な対応をなす相手は、同じ他動詞であっても「ひきこむ」ではなく「ひっこめる」の方なのである。

先に挙げた(9b)の文を、「ひっこむ、ひっこめる、ひきこむ」の三つの動詞に関して再度検証してみよう。

(14) 「ひっこむ～ひっこめる～ひきこむ」

- a. 打たれた投手がベンチにひっこんだ。(自動詞)
- b. 打たれた投手をベンチにひっこめた。(他動詞)
- c. *打たれた投手をベンチにひきこんだ。(他動詞)

自動詞「ひっこむ」に対応する他動詞として位置づけられる語には(14b)「ひっこめる」と(14c)「ひきこむ」の二つがあるが、「ひきこむ」には「あいつを仲間ひきこめ!」のような文に現れる「相手を自分達の集団に含める」といった意味の特殊化が観察される。このため、「ひきこむ」と意味的に共起しづらい名詞が同時に含まれていると、その文はいささか不自然なものになってしまう。(14c)に「?」を付したのはそのような理由による。一方、(14b)の文にはそのような不自然さが感じられない。これは、「ひっこめる」には特殊化した意味が備わっていないからであると考えられる。このように動詞の意味を観察すると、同じ他動詞であっても「ひきこむ」と「ひっこめる」には性質の違いが見られ、意味の特殊化が伴わない「ひっこめる」の方が自動詞「ひっこむ」とより自然に対応することが明らかになる。

また、このことは他動性と意味に関わるもう一つの論点からも論証できる。(14c)の文には「?」マークを付したが、それはこの文が必ずしも非文とは言えないからである。たとえば、散々に連打を浴びた投手をチームメイトがその腕をつかんで強引にベンチにひきこんだ、という文脈ないしは状況を考えれば、(14c)には自然な解釈が与えられよう。しかしそのような文脈に依存した解釈も、文中に含まれる目的語の属性によっては全く成り立たない場合がある。次のような文について考えてみたい。

(15) 「ひっこむ～ひっこめる～ひきこむ」

- a. 必死のダイエットの結果、おなかひっこんだ。(自動詞)
- b. 必死のダイエットの結果、おなかをひっこめた。(他動詞)
- c. *必死のダイエットの結果、おなかをひきこんだ。(他動詞)

(14)の文と違って(15)の文では、目的語として「おなか」という名詞が含まれているが、この名詞は他動詞「ひきこむ」と全く共起できない性質を持つ。つまり「ひきこむ」には、その動作の対象となる名詞について特別な意味制限が伴っているのである。他方、「ひっこめる」にはそのような制限は伴わず、(15a,b)に挙げたように同一の名詞「おなか」が対象として働く自動詞文・他動詞文の対を作り出すことが可能である。

以上検討したように、現代語の音便をめぐる体系では必ずしも常に直列的關係性だけが成り立っているわけではなく、実際にはむしろ並列的關係性の方が有効に機能している場合もある。さらに、視野を広げて日本語の動詞の自他対応のシステム全体を考慮するならば、先ほど(13b)に示した「ひっこむ」と「ひっこめる」の並列的な関係は別に特殊なものではなく、かえって極めて自然な対応関係であることが分かる。なぜなら、日本語の動詞の自他対応には何らかの形態素の付加・削除が関わっており(奥津 1967, 井上 1976, 西尾 1988, 森田 1994, 影山 1996 など), 「ひっこむ」と「ひっこめる」の間にもやはり同様な作用が観察されるからである。

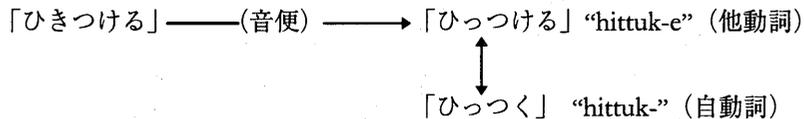
(16) 「ひっこむ」と「ひっこめる」

- a. 自動詞語幹: hikkom-
- b. 他動詞語幹: hikkom-e

影山(1996)のまとめに従うと、「ひっこむ」と「ひっこめる」の対応は自動詞語幹“hikkom-”に対し他動化接辞“-e”が結合するという形で説明されるが、これは「建つ: 建てる, 進む: 進める, 並ぶ: 並べる, 整う: 整える」など多くの動詞の自他対応のしくみと並行する一般性の高いあり方である。

ここで、先ほど示した(13)の関係図を再び見なおしてみると、「ひっこむ」がそれに対応する非音便形を持つのに対し、「ひっこめる」には非音便形「*ひきこめる」が存在しないことに気づく。前節(5)で指摘したように、こうした非音便形の欠如は従来の直列的解釈にとっては説明困難な問題として残ってしまう。もしこの問題を直列的モデルに従って解釈するならば、「*ひきこめる」という架空の語形を仮定してそこから「ひっこめる」が派生されるとする便宜的な方法しか見つからない。だが、並列的モデルに基づいて考えた場合にはそのような便宜的な解釈は必要ない。「ひっこめる」と「ひっこむ」との間に並列的な関係性を認めることにより、他動詞「ひっこめる」の語形は自動詞「ひっこむ」に対して他動化接辞“-e”が付加された形として解釈できるからである。繰り返しになるが、このような語形成の関係は動詞の自他対応に現れる極めて一般性の高いあり方である。その証拠に、接辞“-e”が関わる自他対応の語形成は「ひっこむ: ひっこめる」の間柄だけではなく、「ひつつく: ひつつける」という別の音便形どうしの間にも成り立っている。

(17) 「ひつつく」と「ひつつける」



この対の場合は「ひっこむ: ひっこめる」とは逆に、非音便形を持つ「ひつつける」が他動詞で、自動詞「ひつつく」には「*ひきつつく」のような非音便形が存在しない。しかし、ここでもやはり接辞“-e”の存否に従って自他対応が起こっている様子を見て取ることができる。

本節では、異なる音便形どうしの並列的關係性のモデルが複合語の文法的性質を分析する上で有効に機能することを見てきた。とりわけ、形態上の類似性を元にした従来の直列的な分析が

含む問題点を指摘し、形態上の類似性にとられることなく実質的な文法機能に着目した並列的な分析の視点が必要であることを見た。次の節では、音便形どうしの音韻論的な共通性を観察することによって、並列的モデルの有効性を確かめたい。

4. 音便形の音節構造

まずは、以下に挙げる語を参照されたい。

- (18) おっころす, おったまげる, おっとる, おっぱじめる, おっぼうりだす,
くつつく, くつつける, さっびく, しょっびく, すっこむ, すっころぶ,
すっとばす, すっつぶ, すっつぼける, ずっこける, せつつく,
ぶっかける, ぶったたく.....

これらはいずれも対応する非音便形を持たない語ばかりである。辞典類の記述によっては³, たとえば「おったまげる」などの前項に「押」の字が充てられていたり、「ぶっかける, ぶったたく」などの前項が「ぶち」から派生したものであるとの説明が付されたりしているが、実際に「*おしたまげる, *ぶちかける, *ぶちたたく」といった非音便形が現代語の中で使われているわけではない。また、「おっころす」のように、形の上では「おしころす」という非音便形と対応するものの、意味的に非音便形と全く関係を持たないものもある⁴。つまり上掲の諸語には、非音便形との直列的な関係を構築できないという共通点が見出されるのである。この点に関し本論冒頭で、非音便形を持たない音便形が一体どのような言語的動機に基づいて形成されたのかという疑問を提示したが、本節では音便形に見られる音韻的特徴の考察を通じて、上掲のようなタイプの音便形が適格な形として支持されるための構造上の素地について考えてみたい。

上に挙げた語を並列的に観察してみると、音韻的な側面で顕著な共通性を見出すことができる。その共通性とは、上の語に含まれる「おっ-, くっ-, さっ-, しょっ-, すっ-, ずっ-, ぶっ」などの要素が全て一音節からなっているということである。また、この特徴は「追っかける, 取っかえる, 引っかえす, 突っこむ」など通常の複合動詞の音便形にも共通している。試みに複合動詞のデータベース(野村・石井・林 1987)を用いて検索してみても、音便化した要素が一音節であるケースが圧倒的に多いことが分かる。

- (19) 「うっ-」: 「うっちらかす, うっちらる」など
「おっ-」: 「おっかける, おっばらう」など
「かっ-」: 「かっきる, かっさばく」など
「きっ-」: 「きっそぐ, きったつ」など
「つつ-」: 「つつかえす, つつたてる」など
「とっ-」: 「とつつく, とっばじめる」など
「のっ-」: 「のっかかる, のっとる」など
「ひっ-」: 「ひっかける, ひっばたく」など
「ふっ-」: 「ふっとばす, ふっきれる」など

「ぶっ-」：「ぶつつぶす，ぶっぱなす」など

「よっ-」：「よっぱらう」

「ひん」：「ひんまがる，ひんまたぐ」など

「ふん」：「ふんぞる，ふんづける」など

「ぶん」：「ぶんなげる，ぶんぬく」など

検索対象としたデータベースには現れてこなかったが，実際にはまれに「たたきころす～たたころす，たたききる～たたきる」のように音便化した前項が二音節をなすものも観察される。ただし，こうした二音節の音便形は数量的に少ないばかりか，一音節のものとは違って強い制限の下でしか音便化が生じないようである。「たたき～」から派生される「たたっ～」という音便形では，後項の要素の先頭の子音が/k/である場合にのみ音便が許され，その他の子音で始まる要素が後項に位置した形では音便が起こらない傾向にある。そのために，「たたっ～」のように結果として一音節をなさない要素での音便形は語彙的に安定化する段階にはなく，データベース上に現れにくいと考えられる。

(20) 「たたっ～」

- a. たたっきる，たたっこむ，たたっころす，たたっこわす
- b. *たたっつぶす (たたきつぶす)，*たたっつける (たたきつける)，
*たたっおせる (たたきおせる)，*たたんのめす (たたきのめす)

他方，前項が一音節からなる音便形では，後項先頭の子音の種類に制限がない。一例として「ひっ～」という要素を前項に持つ音便形を見てみよう。

(21) 「ひっ～」

- ・/k-/：ひっかく，ひっかける，ひっこす
- ・/s-/：ひっさく，ひっさらう
- ・/t-/：ひったてる，ひっとらえる
- ・/p-/：ひっぱたく，ひっぱる
- ・/m-/：ひんまげる，ひんめくる

「ひっ～」の場合，後項先頭の子音の調音位置は言うに及ばず，鼻音で始まる要素とも音便を起こすなど，音便に関する分節音上の制限は極めて緩い。

上述の検討を踏まえると，複合語での音便化には「一音節性」という音節構造上の制限が含まれていることが理解できる⁵⁾。このことに加え，第二節で検証したように，音便化が接辞化という形態的な機能の変化をもたらすということを併せて考慮すると，次のような韻律形態論的な鋳型を定義することができる。

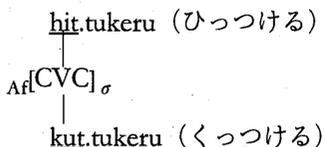
(22) 接辞の鋳型

Affix : [CVC]_σ

これは，複合語前項に相当する接辞の韻律規模を定義したものである。たとえば「ひっつける」

と「くっつける」を例にとって説明すると、第二節で検証したようにこの二つの複合語それぞれの前項要素は実質的には接辞として機能し、同一の文の同じ位置に現れるという相通性を示すが、その際、前項「ひっ-」「くっ-」には接辞として機能するという形態論的な共通性に加えて、ともに一音節をなすという音韻的な共通性も備わっている。これを、音便形どうしの並列的關係とみなして図示すると以下ようになる。

(23) 形態／音韻構造の並列關係



本稿で主張する「構造上の素地」とは、まさに(22)に示した鑄型のことである。つまり、通常の複合動詞での音便形が持つ「1)音便化する要素は接辞化しやすい」「2)その接辞的要素は一音節をなす」という二つの性質が素地となって、非音便形との直列的派生關係を持たない「くっ-」などの接辞の形態(=(18)の語の前項の形態)が支持されているのではないだろうか。(23)に示したように、「ひっつける」と「くっつける」のように対を成す音便形どうしは、(22)の韻律的鑄型を仲立ちとして音韻構造の面でも並列的關係をなしているのである。

5. 結語

本稿では、複合語の音便を論じる上で従来あまり言及されない傾向にあった音便形相互の並列的關係性について、音便形どうしの相通性と前項の接辞化・音便と他動性・音節構造の三つの観点から考察し、音便をめぐる語彙關係を捉える上で並列的な關係を探る必要性があることを論じた。ただ、共時的体系において並列的關係だけが観察されるわけではなく、非音便形と音便形との直列的な關係も依然観察されるという点に注意しておきたい。たとえば、接頭辞「ぶっ-」を含む複合語「ぶっころす、ぶったおす、ぶっこわす」などには「ぶちころす、ぶちたおす、ぶちこわす」という非音便形が対応しており、音便化しない「ぶち-」という要素もまた接辞的な特徴を持つ形態素であることなどを考慮すると、必ずしも常に接頭辞が(22)に示したような一音節の鑄型を持つとは言い切れない部分もある。

注

1. (4a)「ひっつく～くっつく」では、「ひっつく」に対する非音便形として「*ひきつく」という形が用いられないため、非音便形を持たないものとして考えた。
2. 直列的な脈絡では、非音便形と音便形との間に音便規則を介した異形態關係が観察されるが、並列關係では主要部そのものが全く別の動詞であり、音便のような形態音韻論的規則による結び付けが不可能である。
3. 『日本国語大辞典』(小学館)を参照した。

4. 「虫をおっころした」「鼠をおっころした」が自然な文であるのに対し、「*声をおっころした」は不自然である。一方、「声をおしころした」は自然な文となる。つまり、「おっころす」が生物に対してしか用いられない一方、「おしころす」は「声」などの非生物の属性を持つ名詞に対して用いることができる。また、本文中第二節で述べたように、「おっころす」の「おっ-」は専ら接頭辞として機能し、動詞「押す」の持つ実質的な意味は含まないと考えられる。
5. 高山(1993)は、接辞化した形態素における「一音節性」という特徴を、「1モーラ+促音」という構造として説明している。表面的な形式の上ではそのような捉え方でも構わないと思われるが、たとえば「真っ黒、寝っ転がる」のように、本稿で述べた複合語での音便化とは別の要因によって促音が現れるケースを扱う場合を区別して捉えきれないという問題が残る。ただし、このような問題は本稿のように「一音節性」という形で特徴づけを行っても同様に残る問題である。この点については稿を改めて論じる機会を俟ちたい。

参考文献

- 井上 和子. 1976. 『変形文法と日本語（下）』大修館書店.
- 奥津敬一郎. 1967. 「自動詞化・他動詞化および両極化転形 一自・他動詞の対応一」国語学 70 : 46-65.
- 影山 太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山 太郎. 1996. 『動詞意味論 一言語と認知の接点一』(日英語対照研究シリーズ 5) くろしお出版.
- 斎藤 倫明. 1986a. 「複合動詞前項の音便化 一意味との関わりについて一」国語論究. 1 (斎藤 (1992)に再収)
- 斎藤 倫明. 1986b. 「複合動詞音便形の意味 一「接頭辞化」と「強調化」をめぐって」宮城教育大学国語国文 16 : 左 1-12.
- 斎藤 倫明. 1988. 「複合動詞「引く+～」の意味の多様性」国語学 152 : 左 1-15.
- 斎藤 倫明. 1992. 『現代日本語の語構成論的研究 一語における形と意味一』ひつじ書房.
- 高山 知明. 1993. 「複合語における促音挿入と接頭辞「ブッ-」「ヒッ-」等を持つ類との干渉回避について」香川大学国文研究 18 : 62-68.
- 西尾 寅弥. 1988. 『現代語彙の研究』明治書院.
- 野村雅昭・石井正彦・林翠芳. 1987. 『複合動詞資料集』(フロッピーディスク版)
- 森田 良行. 1994. 『動詞の意味論的文法研究』明治書院.